いかに速く到達できるか 日本縦断で限界に挑戦

競技人生約50年、65歳の自転車ロードレース元全日本王者

大石　一夫さん

あの思い出の大会出場から40年、65歳で挑んだ日本縦断タイムアタック。過酷な挑戦を終えたばかりの大石一夫さんに思いを聞きました。



日本縦断タイムアタックに挑戦している大石さん



数々のトロフィーが並ぶシクロオオイシ・ラヴニールの店内

本場欧州で得た大きな感動

40年前の1986年、日本代表として自転車ロードレースの大会「ツール・ド・ラヴニール」に出場しました。フランスなどを駆ける中、本場ヨーロッパ選手のレベルの高さや観客の熱い応援に衝撃を受けました。ロードレースが国民的なスポーツの欧州で得たこの感動は、今でも鮮明に覚えています。

その後、ロードレースの全日本選手権で二度優勝しましたが、けがで1996年に第一線を退きました。2年後、思い入れのある大会の名前を入れた自転車店「シクロオオイシ・ラヴニール」を穂高町に開きました。

競技から離れ、年齢を重ねても、小学校の頃に初めて自転車に乗った時の「どこまで遠く、速く行けるのだろう」という思いは持ち続けていました。今回チャレンジした日本縦断タイムアタックは、10年ほど前から考えていました。ツール・ド・ラヴニールから40年がたち、65歳になった節目に、自分の限界を知ろうと挑戦を決意しました。

挑戦することの大切さ実感

先月9月15日午前4時に北海道稚内市にある最北端の宗谷岬を出発し、2600キロ先の鹿児島県にある佐多岬を目指しました。日本縦断のギネス記録は5日と17分だったので、今回は8日間でのゴールを目標にしました。

1100キロを走って新潟県三条市付近まで来た4日目、アキレス腱の炎症がひどくなりました。これ以上は無理ができないと感じ、残念ながら断念。50年弱にわたって自転車競技の経験を積んできましたが、ロードレースと日本縦断タイムアタックは全くの別物であることを思い知らされました。

今回の経験を通じて、自分がやりたいこと、やれそうなことに諦めずに挑戦することの大切さを感じました。後になって「あの時にやっておけばよかった」と後悔したくありません。また、大きな目標があるからこそ、日々の練習により身が入りました。経験させていただいた家族、帯同スタッフ、支援者には感謝しかありません。

安曇野は自転車乗りに最適

県外出身の私がこの地に定住し、自転車店を構えた理由は、この場所が自転車を乗るのに適した環境だからです。安曇野の道は平坦、アップダウン、峠と多様性があります。健康にも環境にも優しい自転車は、理想的な乗り物です。地元の皆さんにもっと自転車に乗ってほしいと願っています。



秋田県出身で穂高牧在住。自転車ロードレースの全日本選手権で二度優勝するなど、数々の国内タイトルを獲得。自転車愛好家らからの愛称は「レジェンド」。2人の子どもの父親でもある。

小説『安曇野』に触れて味わう 絶品カリー

10月8日　小中学校給食中村屋カリーの日







この日の給食は中村屋カリー。このカレーは、新宿中村屋が学校給食用に開発した安曇野産タマネギ入りの特製ルーで作った人気メニューです。穂高西小学校6年1組ではカリーの日に合わせて、小説『安曇野』に登場する新宿中村屋を創業した相馬愛蔵・良夫妻らゆかりの先人を紹介する動画を上映。その後は地元産食材が入ったカレーをおいしそうに味わっていました。安田愛花さんは「安曇野の出身者が東京の名店を開いたと知って驚いた。カレーも程よい辛さでおいしい」と笑顔を見せました。動画は市内全小中学校で上映するほか、市公式YouTubeチャンネルでも公開しています。

船長ゆかりの地で語る　学童疎開の悲劇

9月20日　対馬丸記念館出張講話・映画上映会



太平洋戦争中に米軍の攻撃を受けて学童疎開船が沈没した「対馬丸撃沈事件」を伝える講話と映画上映会が豊科公民館で開かれました。講話では、対馬丸記念館（那覇市）の平良次子館長（64）と事件で姉2人を失った外間邦子さん（87）が登壇。約1500人が命を落とした悲劇や、厳重なかん口令で長年事件を口にできなかった生存者と遺族の苦しみ、船長を務めた安曇野出身の西沢武雄さんの存在を語りました。

参加した英三千留さん（17・穂高有明）は「当時を想像して聞き入った。戦争を体験していないからこそ、生の声に触れる大切さを感じた」と話しました。

見て聞いて体験！　環境とまちづくりに触れる2日間

10月10日・11日　安曇野環境フェア2026・あづみの市民活動フェスタ2026

楽しみながら環境にやさしい暮らしを考えるイベントが堀金総合体育館で開かれました。会場では、地域の水資源を学ぶ講演会などが行われたほか、環境保全に取り組む約50団体が展示・体験ブースを出展。手回し発電機で紙風船を浮かせる実験を体験した酒井暁穂くん（8・穂高）は「早く回した分だけ発電できておもしろい」と何度も挑戦していました。11日には隣接する常念ドームと堀金中央公園で市民活動フェスタが開かれ、23団体がステージ発表やブース出展で日頃の活動を発表。イングリッシュハンドベル演奏で美しい音色を響かせた耳塚知美さん（56・穂高有明）は「発表を通じて一緒に活動する仲間が増えればうれしい」と活動の広がりを願っていました。





